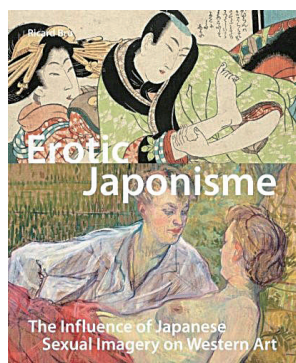


リカール・ブリュ著

『好色のジャポニスム——日本の春画が西洋絵画に与えた影響』

Ricard Bru. *Erotic Japonisme: The Influence of Japanese Sexual Imagery on Western Art.*
Horei Publishing, 2013

マイケル・ツール



春画（ジャパニーズ・エロチカ）は、一般大衆はもとより研究者

をも刺激して止まないものであるが、ここ数年、春画を巡る研究活動は、国際的に大きな賑わいを見せている。一九九五年のインディアナ大学ブルーミントン校で開催された国際会議「セクシュアリティと江戸文化：一七五〇—一八五〇」において春画研究の新しい方向性が打ち出された（Jones 1996）のだが、近年の研究は、それに幾つもの新たなアプローチをつけ加えた。一例を挙げれば、日文研、SOAS（ロンドン大学）、立命館大学の研究者たちによる四年がかりの春画プロジェクトは、これまでにJapan Reviewの特別号（Gerstle and Clark 2013）、二〇一三—二〇一四年の大英博物館展、そのカタログの出版（Clark et al. 2013）といった成果を生ん

でいる。

そのプロジェクトに触発された新しい試みの一つが、トランスナショナルな文化流入の観点からの研究である。リカール・ブリュの『好色のジャポニスム——日本の春画が西洋絵画に与えた影響』（*Erotic Japonisme: The Influence of Japanese Sexual Imagery on Western Art*, 2013）は、西洋絵画に対する春画の影響を正面から扱った数少ない論考の一つである。予備知識を持たない読者にも、春画、および十九世紀末から二十世紀初めにかけての西洋の性愛イメージについて、一六七枚のフルカラーの写真を駆使して初歩から手ほどきしてくれる。ブリュの意図は、春画がヨーロッパの美術商の目を引き始めた一八六〇年代初期から二十世紀最初の数十年までの

期間において、芸術的、美学的視点から、「春画がどのようにヨーロッパの画家たちに感受され解釈されたかを理解し、ジャポニスムの時代の美的基準の概略を示す」(viii頁) ことにあり、過去に著者自らが主事を務めた幾つかの展覧会——「秘められた図像——ピカソと日本の春画」(Bru and Gual 2010) など——の経験と、西洋絵画と春画についての該博な知識に基づいて、春画の発見によってヨーロッパの画家たちが、「一八八〇年代以降、性とエロティシズムの新しい描法を試みるようになっていった」(一四八頁) 経緯がたどられている。

西洋における春画の受容、伝播、影響についての先行研究がないためであろうか、『好色のジャポニスム』の全三章は、幾つかの詳細な議論をのぞけば、大部分がそのテーマに関する鳥瞰図になっている。序論では、春画の西洋への流入が、十八世紀ロマン主義の東洋趣味、および十九世紀のリアリズムの歴史的背景の中に位置づけられる。第一章では、日本との交易と日本の性愛イメージの歴史的文脈が提供される。読者にとって最も興味深いのは、ジークフリート・ビング(一八三八—一九〇五)と林忠正(一八五三—一九〇六)という二人の画商についての記述であろう。ビングは一八七〇年代に日本美術を輸入し始め、一八八一年までには、パリに四店舗を構える「日本美術を扱うヨーロッパ最大の画商の一人」(三十七頁)となった。林は一八七八年、パリ万国博

覧会の通訳としてパリに到着した。一八九〇年代にビングが日本美術から離れると、林が彼の跡を継ぎ、浮世絵の版画や画集を最も手広く商う画商となった。ところが日本では一八七二年の違式誣違条例によって、春画は「猥褻」(三十八頁)として販売が禁止されており、林は外国人に卑しむべき画を売って日本の名誉を汚す者とされてしまった(四十二頁)。

第二章は、春画のコレクション、およびヨーロッパ全土に流通した春画の取引と研究のネットワークの分析になっている。ブリュは春画コレクションの歴史を物語るだけでなく、ヨーロッパ言語による春画研究——エドモン・ド・ゴンクール(一八二二—一八九六)が林忠正の協力を得て書いた『歌麿——青楼の画家』(Ottaviano: *le peintre des maisons vertes*) (一八九一)、フランソワーズ・ボンセットン(一八七五—一九五〇)の『日本の好色画』(*Les boniques japonais*) (一九二五)、ユリウス・クルト(一八七〇—一九四九)が書いたとされる『日本のエロス』(*Japanische Erotik*) (一九〇七)等——にも触れている。この章は、ヨーロッパにおける過去及び現在の春画研究の解説として、第三章への導入の役割を果たしている。

第三章「ヨーロッパ美術に対する春画の影響」は、分量的に本書の大半を占め、ブリュの主要な論点とともに、個々の春画に対する緻密で非常に説得力のある分析を含んでいる。ブリュが特に

注目しているのがエロティックな蛸のモチーフで、彼はその人気の源を葛飾北斎（二七六〇―一八四九）の『喜能会之故真通』（二八一―四）第三巻所収の画に帰している。この有名な春画は二匹の蛸が海女と親密な行為に及んでいるところを描いたもので、ブリュはこの神話的などいってもいいような画想、および他の動物と人間の性交渉を描いた春画が、ヨーロッパの頽唐派、象徴派、モダニズムの人々に与えた影響を、多くの絵画、彫刻、装飾品を通してたどっている（九十一―九十八頁）。章の残りの部分では、フランスの芸術家たち（ドガ、トゥールーズ・ロートレック、ロダン）、次いで、ヨーロッパにおける春画の流通を追いながら、ベルギー、イギリス、ドイツ、スペイン、オーストリアの芸術家たちについて論じている。最後にパブロ・ピカソの春画コレクションに関してかなり詳しい解説がある。

ブリュの議論は非常に多岐にわたっているため、少し急ぎ足に感じられる時もある。ベルギーのジャポニスムについての説明がひとしきり続くと、今度はオーストリアの春画の解釈に話題が転じるといった具合だ。最も興味深く読めるのは、春画コレクターについてのリサーチと、ヨーロッパの画家の絵画と日本の春画を並べてそこに影響関係を見出すブリュの手際である。西洋芸術に対する春画の影響をたどるという大きなテーマを選ぶと、ともすると論点を絞って議論を掘り下げていくというよりは、大家とさ

れる画家の作品を幅広く渉猟して春画の影響を探る作業に傾いてしまう。しかしこれまでの春画のクロスカルチュラルな研究が極めて少ないことを思えば、こうした総論的な研究こそ必要とされていたのかもしれない。また本書を読んでいると、東洋とエロスを結びつけて考えることにはどのような可能性と危険性があるのかということについて、おのずと考えさせられる。

『好色のジャポニスム』は、世界に散在していた春画コレクションから精選した作品を豪華なフルカラーで掲載し、日本とヨーロッパの学術研究を繋ぐことによつて、西洋モダニズムの芸術制作を理解する上で、東洋の影響と性愛イメージの研究が重要なことを強く訴えている。

参考文献

- Bru and Gual 2010
 Ricard Bru and Malen Gual, eds. *Secret Images: Picasso and the Japanese Erotic Print*. Thames and Hudson, 2010.
 Clark et al. 2013
 Timothy Clark, C. Andrew Gerstle, Aki Ishigami and Aiko Yano, eds. *Shunga: Sex and Pleasure in Japanese Art*. British Museum Press, 2013.
 Gerstle and Clark 2013
 C. Andrew Gerstle and Timothy Clark, eds. *Japan Review 26* (2013) Special Issue
 Shunga: Sex and Humor in Japanese Art and Literature.

Jones 1996

Sunie Jones, ed. *Imaging/Reading Eros: Proceedings for the Conference, Sexuality and Edo Culture, 1750-1850*. East Asian Studies Center, Indiana University, 1996.

* 本稿は、*Japan Review* 28 (2015) に掲載された英文テキストの日本語訳である(南谷覺正訳)。